

川端康成の『眠れる美女』と自由間接話法

— ウルフの『ダロウェイ夫人』の文体との比較研究 —

Usage of Free Indirect Style in Kawabata's *House of Sleeping Beauties*

— A Comparison with the Style of Virginia Woolf's *Mrs. Dalloway* —

Sharif MEBED

キーワード：自由間接話法、語り手、自由連想、話法の移り変わり

Key words : The Free Indirect Style, Narrator, Free Association, Alternation of Narrating techniques

要約

川端康成の『眠れる美女』（昭和35年）とヴァージニアウルフの『ダロウェイ夫人』（昭和元年）という二つの作品は、セッティングやテーマや出来事などが異質であるため、比較するところはないと思われる。しかしながら、よく観察すると両作品に出てくる語り手の語る方法に同質のパターンが見られる。このパターンの特徴は、センテンス毎に、語り手に属する客観的な声から主人公に属する主観の声へと移り変わりが目立つ。『ダロウェイ夫人』の場合、この多数の観点からの語りは、外部に立つ客観的語り手の話法と主人公が考えていることを伝達する間接話法と自由間接話法という多数の表現方法を交互に用いることによって実現されている。川端康成の『眠れる美女』でも『ダロウェイ夫人』と同様、センテンス毎に物語の外部に立つ客観的語り手（三人称）から、間接話法を経て自由間接話法への移動によって主人公の物理的な行動と内面的思索という両面が表現されている。しかし日本語の言語的特性によってそれぞれの文章が自由間接話法（語り手の解説）か自由直接話法（主人公の内面的考察の引用）かということを見分けることは難しい。両作品で見られるセンテンス毎の語り手と主人公の関係の変化は、外部の描写から内的黙想の描写へと滑らかに表現を可能にしている。よって、読者は主人公の意識を瞥見できるのである。

Abstract

Because of divergent settings and themes, Kawabata Yasunari's *House of Sleeping Beauties* (1960) and Virginia Woolf's *Mrs. Dalloway* (1925) do not appear to have any similarities at all. However, a close inspection of the styles in these two novels reveals a comparable pattern of narrative. This pattern is characterized by a sentence-by-sentence transition from a descriptive voice belonging to the narrator, and expressing

the narrator's opinion, to a subjective expression of the thoughts of the character, still within the narrator's discourse. In Mrs. Dalloway, this is done by alternating between external narration, indirect speech and free indirect speech. Kawabata's *House of Sleeping Beauties* uses a similar pattern, alternating between external narration, indirect speech, free indirect narration and free direct narration. However, due to the nature of the Japanese language, it is unclear whether many sentences are free indirect (explanation by the narrator) or free direct narration (quotation of inner thought of the character). The result of this progression from external objective narrative to subjective reporting of thoughts allows the narrator to flow seamlessly from external depiction to expression of internal rumination. In doing so the reader has a chance to penetrate into the deep areas of the unconsciousness.

始めに

本稿では、ヴァージニア・ウルフの『ダロウェイ夫人』¹ (1925)と川端康成の『眠れる美女』² (1960) との二つの作品における表現手法の特徴の類似性を明らかにする。これまで、ウルフの『ダロウェイ夫人』や『灯台へ』(1927) などに出てくる語法を巡る研究が多く、その代表的なものとして、David Dowling (1991)、や Dorrit Cohn (1978)、Seymour Chapman (1978) を取り上げることができる。しかしながら、川端康成の『眠れる美女』の諸テーマに関する研究が多いものの、語法と語り手の存在に関する研究は見当たらない。物語学は川端文学の中で、これまで見えてこない新しい問題に光を当てるものであるため、本稿の考察は新しいものと考えられる。

舞台やストーリーの内容の面から見て、この二作品はそれほど類似していないように思われる。『ダロウェイ夫人』の舞台はロンドンの上流社会であり、その主人公のクラリッサは、貴婦人である。彼女が開催するホーム・パーティーに英国の総理大臣が来る程のエリート的身分である。他方、『眠れる美女』の主人公の江口老人は、クラリッサと同様上流社会の一員であるものの、作品で描かれているのは彼の秘密行動である。『眠れる美女』の舞台はパーティのような公の場ではなく、一夜に一人しか受け入れない秘密の宿である。謂わば『眠れる美女』は、上流社会の暗い裏を探る小説である。換言すれば社会の無意識を覗く作品である。男女の性的関係という『眠れる美女』の主なテーマ³は、『ダロウェイ夫人』の場合では、ほとんど見当たらないものである。このように『ダロウェイ夫人』と『眠れる美女』との二つの作品には比較できる部分が少ないように思える。しかしながら、別の観点から見ると類似点が現れてくる。

『ダロウェイ夫人』の主人公クラリッサは、事件など、なにも起こらない一日を過ごしている内、自分の人生を振り返り、特に青春の出来事を思い出す。また、愛と死など人間の心に最も重

要な問題を考える場面もある。一方、『眠れる美女』では、一日ではないが、10数時間の間の出来事が描かれていながら、殆どなにも起こらず、主人公が自分の孫の誕生から母の死まで様々なことについて考える。主人公は裸の女性と一緒に寝ており、それらの女性が細かく描き出される場面もあるが、高田瑞穂(1981)や武田勝彦(1981)などの指摘の如き、『眠れる美女』は好色文学ではない。裸の女性は主人公の過去、特に男女関係の過去を主人公に思い出させる。それによって川端は主人公の前意識⁴や潜在意識を描き出すきっかけとなる。『ダロウェイ夫人』では、主人公の回想のきっかけになるような裸の男はもちろん出てこないが、クラリッサは一人で、思い出に耽る場面が多い。さらにクラリッサは、女中など、身分的に低い人物と一緒にいる時は自分が一人であると同様、のんびりと回想に耽ることが少なくない。こうして、若い日々の記憶に耽る場面が両方の作品の大半を占める。以下、これらの記憶や思いがどのように表現され、記述されているかについて分析していく。まず、登場人物の想念を描き出す方法について考察する。

1 物語学における間接話法の問題

ヨーロッパの諸言語の文学研究における表現の分析は1970年代に盛んになり、フランスのジュロード・ジャネット(1980)や、オランダのミエケ・バル(1997)そして、アメリカのドリット・コーン(1978)やその他の研究者は物語のディスクール研究に興味深い成果を挙げた。その中の課題の一つは自由間接話法の問題である。英語の場合では、他者の言うことを、別の人に伝える時、一方、その人が用いた言葉をその通りに伝えるという直接話法がある。他方、他人の発言を要約する形で伝えるという方法があり、これが間接話法である。従って、物語の場合では、登場人物の言うことをそのまま引用符の中に入れるというのは直接話法であり、また逆に、語り手が登場人物の言うことを代弁し、その内容を解説するというのは間接話法である。登場人物の考えていることも同じ二種類の表現方法によって読者に伝えることができる。

下の表で英語における直接話法・間接話法を比較する。

直接話法：“I will not marry him,” she thought

自由直接話法：I will not marry him.

間接話法：She thought (that) she would not marry him.

自由間接話法：She would not marry him.

このように英語では、直接話法から間接話法へ変わる際、二つの統語的変化が起きる。一つは一人称から三人称の変換である。さらに、現在形から、過去形へと、また過去形から過去完了形へとというように時制が一つ前に変わって行くのである。そして「he said」や「she thought」などを省略すると自由直接あるいは、自由間接話法になる。

ジョイスの『ユリシーズ』⁵で特に「テレマコス章」、「ネストル章」、「プロテウス章」の三つ

の章においては、語り手の語りいと主人公の内的独白の語りいと交互に出てくるというパターンが顕著である。つまり、ジョイスは語り手の語りいとを中断して、主人公の考えていることをそのまま引用するという様式を使用している。そうすると主人公の行動を描くのは語り手であるに対して、主人公の考えていることは、先ほど触れた直接話法（＝内的独白）によって表現されている。それに比べるとウルフの『ダロウェイ夫人』の場合では、人物の頭に浮かんでくる想念が、語り手の語りいの中に現れ、語り手の語りいに融合されている。しかしながら、このテクニクの効果は、ウルフの作品をすらすら読めるというものだけではない。前に触れたシーモア・チャットマンが指摘したように、直接話法と間接話法を比べると、内的独白（直接話法）で表現されるのは、主人公の言語的想念に限られている。⁶ それに対して、間接話法はこの制限がなく、主人公の言葉による想念をもちろん、非言語的な知覚も語り手によって文章化され、表現できるという功利がある。このように英文学において、間接話法は、語り手のディスクールの中で、登場人物の主観的想念や非言語的思索を表現できる。⁷

間接話法は『ダロウェイ夫人』でよく用いられる。ここでその一例を引用する。

①What a lark! What a plunge! ②For so it had always seemed to her, when, with a little squeak of the hinges, which she could hear now, she had burst open the French windows and plunged at Bourton into the open air. ③How fresh, how calm, ④stillier than this of course, the air was in the early morning; ⑤like the flap of a wave; the kiss of a wave; chill and sharp and yet (for a girl of eighteen as she then was) solemn, feeling as she did, standing there at the open window, that something awful was about to happen; looking at the flowers, at the trees with the smoke winding off them and the rooks rising, falling; standing and looking until Peter Walsh said, “Musing among the vegetables?”—was that it?—“I prefer men to cauliflowers”—was that it? He must have said it at breakfast one morning when she had gone out on to the terrace—Peter Walsh. ⑥He would be back from India one of these days, June or remembered; his eyes, his pocket-knife, his smile, his grumpiness and, when millions of things had utterly vanished—how strange it was!—a few sayings like this about cabbages. (①、②、③などは著者によるもの。以下も同じ。)⁸

この引用を次のように分析できる。①と③は感嘆文である。近代小説の多くでは、客観的な態度を保持するために、小説の語り手は自分の感情を抑える。よって、①と③の言葉は語り手のものではなく、クラリッサの思索の引用として捉えることができる。それに対して②、④、⑤、⑥

には、語り手の声によって、主人公の感情や、気持ちや、意見などが表現されている。言い換えると①と③は、自由直接話法である。ウルフは自由直接話法の使用を避けていたようだが、⁹ 感嘆文は間接話法では表現できないものなのでやむをえず使っていたと考えられる。②は間接話法であり、④、⑤、⑥には、自由間接話法が姿を現している。ウルフはこの引用だけではなく『ダロウェイ夫人』全体において、登場人物の行動と連想と記憶、つまりあらゆる外的行動と内的想念を描くため、直接話法、間接話法、自由直接話法、自由間接話法を交互に用いている。上に触れたように、ウルフに関する研究の中で、この問題を取り上げるものは少なくない。¹⁰ しかし、川端康成の作品に出てくる自由間接話法の役割を分析する既成の研究はない。そのため新たな解釈が可能であると考えられる。しかしながら、その前に日本語における自由間接話法について考察する必要がある。

2 日本語における自由間接話法の問題

先ほど記した英語の話法を比較する表をここで日本語に訳す。

直接話法：「彼と結婚しない」と彼女は思った。

自由直接話法：彼と結婚しない。

間接話法：彼女は彼と結婚しないと思った。

自由間接話法：彼と結婚しない。

上に記したように日本語は、間接話法と直接話法を区別する統語的要素がない。池上嘉彦が指摘したように日本語の場合では、自由直接話法と自由間接話法とは同じように見える場合がほとんどである。¹¹ これは日本語におけるフィクションのディスクールの大きな特徴であろう。しかしながら、統合的観点から見て、間接話法というものは存在しないといっても、意味的観点から、日本語でも間接話法というものが存在しているに違いない。そして日本の小説において、語り手による代弁されているディスクール（間接話法）は様々な変種が認められる。例えば、次の二種類の間接話法の例文でも、異なる雰囲気が出されている。

書き言葉：彼は現在の企画が利益を増やす可能性が低いという意見を抱いていた。

口語的表現：彼は、部長の企画がつまらな過ぎて、客なんか集まるわけねーと思っていた。

上記の例でも見られるように、「口語的表現」の文章で、話し言葉、方言、専門用語、職業用語、俗語など、被伝達部の表現に主人公が使いそうな単語や活用が目立つ表現はある。「口語的表現」話法は引用文に極めて近い叙述方法であり、文章事態が主観的である。それと反対に、上

に記した「書き言葉」の例文では、主人公の考えていることは完全に語り手の言葉によって表現されている。語る声は明らかに語り手に属するもので、「口語的表現」の例に比較すると、客観的な表現方法である。さらに「書き言葉」の場合では、主人公の非言語的で曖昧な思索を表現できるという功利もある。上の二種類の間接話法に加えて、書き言葉的要素も口語的要素も目立たないという中性的文章の変種もある。以下『眠れる美女』の分析に、これらの叙述手法はすべて使われているということが明らかになる。

3 『眠れる美女』の分析

先ず『眠れる美女』における主人公の想念の描写を分析し、語り手と主人公の関係を明らかにする。次の引用には、江口老人が眠れる美女の家での初めての夜が描かれている。

- ①…今もその歌を思ひ出して、隣の部屋に眠ってゐる、いや、眠らせられてゐるのは、「水死人のたぐひ」のやうな娘ではないのかと思ふと、立って行くのにためらひもあるのだった。
- ②娘がなにて眠らせられてゐるか聞いてはゐないが、とにかく不自然な前後不覚の昏睡におちいつてゐるらしいから、たとへば麻薬にをかされたやうな鉛色に濁った肌で、目のふちはくろずみ、あばら骨が出てかさかさに痩せ枯れてゐるかもしれない。③ぶよぶよ冷たくむくんだ娘かもしれない。いやな紫色によごれた菌ぐきを出して、軽いいびきをかいてゐるかもしれない。④江口老人も六十七年の生涯のうちには、女とのみにくい夜はもちろんあった。¹²

上に記した例の最初のセンテンスを見ると、フィクションの世界の外から客観的な態度で報告する語り手の存在が分かる。①は、語り手による江口の心境に対する意見と報告である。それと対照的に、②の文章以降は、異なる特徴を示している。主人公が隣の部屋で眠っている女性の姿を想像していることが描かれている。女性の姿をすでに知っているはずの語り手の憶測よりも、その姿はまだ見ていないが、深い関心を持っている江口の頭に浮かんでいる連想であると考えられる。それを示す一つのシニフィアンは、「かもしれない」という仮定法の表現である。女性の姿が醜いのではないかと悪い予感に苛まれて、隣の部屋へ進むに躊躇しているのも無論、語り手ではなく江口老人である。すなわち、上記の引用において、語り手の意見と声から、主人公の想念と主人公の内的声へとの動きが重要な特徴である。次に記す『眠れる美女』から引いた引用にも、このような話法の移り変わりが繰り返して使われている。

- …①この妖婦じみた娘はこの後どのやうな一生の転変をたどってゆくのだらうかと、江口は親心に似た思ひが湧いて来た。②江口もすでに老いたしるしだ。③娘はただ金が欲しさで眠ってゐるだけにちがひない。しかし金を払ふ老人どもにとっては、このやうな娘のそばに横た

はることは、この世ならぬよるこびなのにちがひない。④娘が決して目をさまさないために、年寄りの客は老衰の劣等感に恥ぢることがなく、女についての妄想や追憶も限りなく自由にゆるされることなのだらう。⑤目をさましてゐる女よりも高く払って惜しぬのもそのためなのだらうか。⑥眠らせられた娘がどんな老人であったかいっさい知らぬのも老人の心安さなのだらう。¹³

この文章の①は明らかに語り手による主人公の心境の間接報告である。②は語り手の①に対するコメントである。③の二つの文章は、語り手のコメントではなく、①で描き始めた主人公の思索の続きであろう。この二つの文章は①のように付加がないけれども、文章の流れで、江口の女性についての連想の続きとして捉えることが妥当だと考えられる。そして、④と⑤も、付加がないため、主人公の意見か語り手の意見かという問題を解く手がかりがない。文脈から考えるとこれらのセンテンスも主人公の思索であるが、そうでないと反論できないことはない。前に論じた「書き言葉」・「口語表現」の間接話法の問題を考えると③、④、⑤は中性的間接話法である。すなわち、③、④、⑤において、語り手と主人公が融合されているという効果がある。これらの文章は、語り手と江口老人がはっきりと独立している①や②や⑥と対比的であり、話法の移り変えの手法がここでも目立っているのである。こうして、川端は主人公の主観的内的思索をスムーズに伝えることができ、この表現手法の使用を次の引用でも考察する。

①「こんなところで、なぜ母を最初の女などと思ったのだらう。」と江口老人はあやしんだ。
 ②しかし母を最初の女としたからには、そののちのいたづら遊びの女などは思ひ浮かべられもしなかった。③そして事実の上最初の女は妻であらう。④これならばいいが、すでに三人の娘を嫁に出してしまった老妻はこの冬の夜にひとりで眠ってゐる。⑤いや、まだ眠れないでゐるだらうか。⑥このやうに波の音はないが、夜寒はここよりきびしいかもしれない。
 ⑦老人は自分のたなごころのしたにある二つのちぶさはなんだらうと思った。¹⁴

この例は、引用符を用いる直接話法として始まり、①では語り手と主人公が完全に互いに独立している。センテンス②では、主人公が考えていないことが報告されているので、外部の語り手による事実報告として捉えることができる。自由話法の③は、語り手の存在を暗示する「事実の上」という硬い言葉から見ると、語り手による自由間接話法だと思える。しかしながら、同じセンテンスの最後に「だらう」という口語的な表現によって、江口の声にも染まっているように考えられる。つまりこれは前に触れた中性の表現ではなく、新しい両性（あるいはアンビバレント）の変種の表現である。そして次の文章の⑤には「いや」という語が出て、前のセンテンスに現れた「妻が眠っている」という報告が間違っていて、「実は眠っていないだらう」という描写であ

る。この文章には、妻に対する同情的表現のため、語り手の意見ではなく主人公の考えている想念であると考えべきである。しかし声は誰のものであるかということは明確ではない。⑥は語り手の代弁である自由間接話法か、それとも主人公の自由直接話法（内的独白）である。この二つの選択肢から一つを選ぶことが難しく、④、⑤、⑥の声は語り手に属する可能性でもあり、江口に属する可能性もあるが、⑦では、再び完全に外部の立場からコメントする語り手の声に戻ってきている。さらに、②から⑥の間に主人公がリアルタイムに考えているように描かれている。これによって、川端は主人公の自由連想による「意識の流れ」的な文章を実現していると思われる。この引用文で見るように、七つの文にかけて、センテンス毎に語り手の存在と意思を感じさせる文から、主人公の想念と主観を目立たせる文章へと展開が顕著である。

4 結論

センテンス毎に客観的語り手の報告から、主人公の主観的な連想へという進行は、川端の作品の中で、主人公の思索と記憶を主なテーマとする『眠れる美女』の独特な手法である。『眠れる美女』における話法の移り変わりは、『ダロウェイ夫人』と同様、作品のテーマと深く関わっている。両作品は外的描写と内的描写を同時に発展させる。語り手の存在が目立つ文では、主人公の物理的行動が表現されており、自由間接話法や自由直接話法の文の中では、主人公の自由連想が描かれている。

『眠れる美女』における、センテンス毎の客観的語り手の報告から主観的 direct 話法あるいはそれに近い語り手による自由間接話法のディスコースへの移り変わりは、ウルフの作品における多数的話法の使用に似ているといえる。この二作品の間は、手法が類似しているだけでなく、話法の移り変わりが齎す効果も同じように思える。両作品には、外部から見る人物の行動と、内的想念という両側面の切り替えがスムーズに表現されている。本稿で見てきた手法の移り変わりによって『眠れる美女』と『ダロウェイ夫人』は、外的世界と主人公の内的世界を巧に表現し、陰影豊かな作品として仕上げられているといえよう。

引用文献

- Bal M, 1997. *Narratology: introduction to the theory of narrative* (2nd edition). University of Toronto Press.
- Cohn D, 1978. *Transparent minds: narrative modes for presenting consciousness in fiction*. Princeton University Press.
- Chapman S, 1978. *Story and discourse narrative structure in fiction and film*. Cornell University Press.
- Dowling D, 1991. *Mrs. dalloway: mapping the stream of consciousness*. Twayne.

- Genette G, 1980. *Narrative discourse*. Cornell University Press.
- 池上嘉彦他, 1986. 日本語の語りのテキストにおける時制の転換について. In: 語り・文化のナラトロジー (記号学研究6) 東海大学出版会 pp. 45-74.
- Joyce J, 1992. *Ulysses*. Penguin.
- 川端康成, 1980. 『川端康成全集 18 巻』「眠れる美女」. 新潮 pp. 135-228.
- 重松泰雄, 1987. 『『眠れる美女』の幻視のエロス』. In: 国文学 12月号 pp. 86-93.
- 高田瑞穂, 1981. 『眠れる美女』の作品構造と主題. In: 川端康成研究叢書9.教育出版センター.
- 武田勝彦, 1981. 『眠れる美女』論--現実と真実の狭間. In: 川端康成研究叢書9、教育出版センター.
- Woolf V, 1996. *Mrs. dalloway*. Penguin Books.

 注

- 1 本稿でペンギン社の1996年版を使う。
- 2 川端康成(1980)『眠れる美女』pp.133-228
- 3 『眠れる美女』におけるエロスのテーマについて重松泰雄(1987)は論じている。p.87
- 4 意図的に思い出せる記憶全体という意。
- 5 本稿でペンギン社の1992版を使う。
- 6 Chapman, Seymour (1978) pp.181-186
- 7 この問題について、ドリット・コーンは *Transparent Minds: Narrative Modes for Presenting Consciousness in Fiction*. (pp.99-107) で詳しく論じている。
- 8 Woolf (1992) p.5
- 9 Dowling, David, (1991) pp.46-47
- 10 例えば、Cohn (1978) pp.104-109
- 11 池上嘉彦(1986) p.70
- 12 川端康成(1980) p.138
- 13 川端康成(1980) p.167
- 14 川端康成(1980) p.224